

二〇二三年五月一日

会報



■巻頭言

アメーバから関西支部まで

関 肇

関西支部の創設から、今年で四十四年になる。創設時の第一世代から教えを受けた第二世代が、いまやベテランないし中堅の研究者として活躍している。そしてそのまた教え子たちの第三世代が、そろそろ育ちはじめる時期になりつつある。そうした世代間の見えないつながりを考えるとき、ワイスマンの生殖質連続説が想起される。

一九世紀ドイツの生物学者ワイスマンの唱えたこの学説は、弟子の石川千代松が『アメーバから人間まで』などで解説している。単細胞生物のアメーバは一つの細胞が二つに分裂して増殖するのであって、二つの細胞間には親もなければ子もありはしない。人間の生殖質（生殖細胞）においても、「親も子も孫も皆同一の先祖質から出来て来る」ことに変わりはない。「茲に一株の芝の草があるとする、其始めに生へたものが茎根を出した後、其株は冬になって枯死するが、此茎根の先きから翌年に又新しい茎が生へるが、之れも又其年の末に枯死？するが茎根は生きて居て、之が又延びて春が来ると又之れから新しい株が生へる。斯様にして此芝は無究に生存して行く」のであり、それと同じように「此個体は毎代に於て死ぬものであるが生殖質は万古不死のものである」とされる。

『アメーバから人間まで』への言及は、山本有三の『波』に見ることが出来る。そこでは我が子との血縁関係に疑念を抱く主人公が、この書物に慰藉を求めて、生殖細胞の不滅説から個を越えた「超絶的なもの」の作用へと思いを馳せる。

また、同じワイスマンの学説に導かれるかたちで、内田百閒は「子によつて不死」という觀念にたどり着いている。漱石の死による「死の不安」にとらわれた百閒は、恩師の一周忌を経てようやくそれを克服することができるようになる。「此頃は、子供は是非生きたくはないと思ひ出した。さうして、私は不死なる事を実感して来た」、「私は「心の不滅不死を自分自身の心の中に悟つた」『百鬼園日記帖』とあるが、こうした考えを支えたもののひとつが、「子孫によりて不死」というワイスマンの学説だった（永井太郎「内田百閒の死生観」）。

関西支部に話を戻せば、これから育っていく新しい世代、それをここでは「子孫」という言葉をもじって「支、孫」と仮称してみたいが、さて世代間の連続性としての「支孫によりて不死」を確かなものとするにはどうあるべきか。その道筋を見定めることは容易でないが、さしあたり第三世代が伸び伸びと成長していくための、いわば公園の砂場のような存在として関西支部があり続けられればと願っている。

■支部大会のご案内

二〇二三年度 春季大会

日程：二〇二三年五月二十八日（日）

場所：京都外国語大学

※春季大会はオンラインでの中継を予定しております。詳細につきましては、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。



【プログラム】

■開会の辞 京都外国語大学 長濱拓磨

■特集企画

〈中島敦〉の現在とこれから

（趣旨説明・司会）浅井航洋、光石亜由美
（発表者）ボヴァ・エリオ、渡邊ルリ、高芝

麻子

■閉会の辞 関西支部支部長 関肇

■特集 〈中島敦〉の現在とこれから

【企画要旨】

二〇二三年の春季大会では、「〈中島敦〉の現在とこれから」と題する特集を組み、「中島敦」文学研究の先端を見つめ、その可能性と問題について考えたい。はたして、文学史に確固とした位置を占める〈中島敦〉の文学をあらためて現代にひらくことは可能だろ

うか。

〈中島敦〉の文学は、これまでに多くの論者による検討がなされ、研究の厚い蓄積を誇っている。〈南洋行〉や〈朝鮮〉での動向について丹念な調査がなされ、〈中島敦〉と〈植民地〉の関係が盛んに議論されてきた。〈中国古代〉や〈漢詩〉、〈西洋〉の文学や思想に着目した比較文学研究や典拠研究も盛況である。国語教科書においては、「山月記」が定番教材として不動の地位を占めており、次々に研究論文、教育論文が発表されている。このように活況の〈中島敦〉研究の先端では、どのような可能性と問題が生じているのだろうか。

たとえば、〈中島敦〉のオリエンタリズムや他者へのまなざしは、今日どのように評価され、あるいは批判されるべきなのか。比較文学研究や典拠研究は、〈中島敦〉文学の全体像や作品の読みをどのように更新させるのか。作品論が集中する「山月記」では、李徴の「人間性」を道徳的に批判する読み方が依然として教育現場を中心に根強く広まっている一方で、作品の〈語り〉に注目が集まるようになってきている。〈語り〉の権力性を批判的に検討する視点は、作中人物の人間性の分析に重点を置く読みをどのように相対化しているのか。これまでの研究成果は、これから私たちが生きていく現代の社会や教育の現場にどのような光をもたらすだろ

うか。

本特集では、まずボヴァ・エリオ氏に「中島敦の文学における言語と死」と題して、「山月記」をはじめとする「古譚」の作品を中心に、死に抗する言語の位相についてご発表いただき、次に渡邊ルリ氏に「中島敦における典拠受容と創作」と題して、自筆草稿の推敲過程などを手掛かりに、典拠から独自の人間像を彫り上げる中島の創作手法についてご発表いただき、最後に高芝麻子氏に「中島敦文庫の漢籍から考える唐人李徴」と題して、漢籍の考察によって李徴の造形の背景をさぐるご発表をいただく。お三方のご登壇と質疑応答によって、本大会が、〈中島敦〉研究の先端からさらに前進する絶好の機会となることを期待している。

「発表要旨」

中島敦の文学における言語と死

ボヴァ・エリオ

中島敦の文学は、なぜこんなにちなお面白いのか。その文章と内容に魅力が認められるのは当然として、特定の時代性を表現しながら、そこに（日本に限らず世界の）二〇世紀につながる問題性が内在しており、後の時代に通じるものを残しているのも理由のひとつである。すなわち、中島後の文学や文芸批評あるいは哲学を経験し受容した現代においても、中島敦の文学が（なおも）通じると

いうことである。

「通じる」ものの一つに言語（language）の理解がある。この度、「文学史に確固とした位置を占める〈中島敦〉の文学をあらためて現代にひらくことは可能だろうか」という本大会の趣旨文中にあがるこの問いに接近しながら中島敦の文学における〈言語と死〉の考察を試みたい。

本発表では短編集『古譚』の作品を念頭に置きつつ、〈死〉の脅威に抗して、永遠を語る言説（ディスクール）、というよりも、永遠の語りではもはや自らを支えられない永遠的な言説になる——自らを無限に追求める運命にある——言語の位相を捉える。「狐憑」、「木乃伊」、「文字禍」、「山月記」から浮かび上がる言葉と文字、ナレーションの理解、最終的にその古の譚の相を現代について考えていきたい。

中島敦における典拠受容と創作

渡邊 ルリ

中島敦作品の主要な漢籍典拠（原話）は、ほぼ特定されているが、構想や表現を採り入れたものや、主題や挿話の本質に関わる〈隠された典拠〉が、平成以後も見いだされている。

漢籍典拠をもとに人間の生を創作するとき、中島敦は、①典拠の記述を活かし、②類似する表現を違う文脈に移して意味を転じ、

③典拠を大胆に改変して新たな挿話を加える。たとえば『山月記』で虎になることを〈酔ふ〉と語るのは、典拠の一つ『人虎傳』（唐人説書）にあるが、『人虎傳』の李徴が虎の記憶を語るのに対して、『山月記』の李徴の〈虎の時間の記憶がなく、人間の時間を失いつつある〉改変は、己の残酷な所業を直視し難く、人間の心を失うことを何より懼れる語りに結びついている。「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」（性情）を内なる虎とし、哀慘に「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所」を感じさせたのは創作だが、中島はこの二つを直接関連させず、同時に、李徴に詩の理想や意味を語らせず、彼の「詩人」像を外面的表現にとどめている。

歴史的文献を以て語る中島作品の語り手は、時には人物の心情に成り代わり、時にはその意識を超えて人物を形容し評価する。李徴・崩潰・叔孫豹・紀昌・子路・李陵は、情況も性情も異なるが、人ならばありうる錯誤を重ねる人間であり、それを照らす別の視座をどこ（誰）に置き、彼らがどのような認識に導かれるかにも違いがある。中島は人物に認識の限定性を与え、その悔恨と自己発見においても至りえない限界を描出する。

本発表では、自筆草稿の推敲過程も手掛かりにして、典拠から独自の人間像を彫り上げる中島の創作手法を読み解きたい。

中島敦文庫の漢籍から考える唐人李徴

高芝 麻子

中島敦は「山月記」において、李徴が虎となった理由を李徴自らに「飢え凍えようとす
る妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を
気にかけているような男だから、こんな獣に
身を墮すのだ」と語らせている。虎になつて
なお「己は、己の詩集が長安風流人士の机の
上に置かれていてる様を、夢に見ることがある」
と述べるほどの詩への強烈な執着は、『太平
広記』や『唐人説書』の李徴の物語からは読
み取れない、敦の独創である。本発表では敦
が李徴をこのように造形した背景について、
出典考証とは異なる角度から漢籍に基づき
考えてみたい。例えば、中島敦文庫（神奈川
近代文学館蔵）の四部叢刊本『唐詩紀事』巻
三十八には、「則僕宿昔之縁在文字中矣（つ
まり私は前世から文字との因縁があつたと
いうわけだ）」役声気連朝接夕、不自知其苦
非魔而何（声をからして朝から晩まで、つら
いとも思わず（詩を作り続ける私は）魔でな
いとすれば何だというのだ）」など白居易自
身の詩への執着が表明された部分に、朱で傍
点が付されている。傍点を打ったのが敦であ
るか、父田人らであるかは不明であるが、漢
学の家系中島家で共有されている唐詩人イ
メージがあると仮定すれば、上記のような句
読・傍点箇所を検証は、「山月記」研究にい

くらかでも資するものとなりうるのではな
いか。そのような視点に立ち、中島敦文庫の
集部の漢籍の句読・傍点箇所を中心に検討し、
漢籍から李徴の苦悩に光を当ててみたい。

■新刊紹介

西山康一・掛野剛史・竹本寛秋・荒井真理亜・
庄司達也 共著

『小天地』復刻版・別冊』

荒井 真理亜

『小天地』は一九〇〇年一〇月から一九〇
三年一月まで大阪で発行された総合文藝雜
誌である。発兌元である金尾文淵堂は、明治
から昭和初期にかけて多くの美本を世に出
したことで知られる。もとは仏教書を専門に
扱う書林であつたが、金尾種次郎が主人とな
つてからは文学書の出版に力を注いだ。その
始まりは一八九九年の雑誌『ふた葉』の創刊
と薄田泣菫の『暮笛集』の刊行である。『ふ
た葉』の後身として創刊されたのが『小天地』
で、薄田泣菫、平尾不孤、角田浩々歌客が編
集を担当した。

『小天地』はその存在を知られてはいたが、
多くが散逸しており全二五冊を閲覧するの
は困難であつた。今回、琥珀書房から全冊復
刻されたことで今後の研究の進展が期待さ
れる。

復刻版には別冊があり、五本の解説が収録
されている。掛野剛史『小天地』と編集者

薄田泣菫——『新小説』『文芸倶楽部』との
比較から——」は『小天地』が『新小説』を
模倣しつつも独自の展開をみせた点として
「社会」欄の充実注目した。その具体的な
内容について松崎天民の記事を中心に論じ
たのが、西山康一『小天地』がジャーナリ
ズムに齎したもの——松崎天民の掲載記事
を視座として——である。『小天地』には

薄田泣菫、河井醉茗、与謝野鉄幹や与謝野晶
子など同時代の詩歌人の作品が多数掲載さ
れているが、竹本寛秋「雑誌『小天地』と韻
文へのまなざし」によると『小天地』は従来
の「詩」の枠組みを捉え直し、拡張すること
を志向していたという。『小天地』が視覚表
象においても新しい雑誌を創造しようとし
ていたことは荒井真理亜『小天地』の美術」
に詳しい。『小天地』の入稿原稿が残ってい
たことは驚きだが、庄司達也『小天地』入
稿原稿／零葉七種の紹介」はその影印もあり
貴重である。西山作成『小天地』小説欄掲
載作品の梗概、掛野作成『小天地』総目次、
巻末の『小天地』執筆索引」を見れば、
泉鏡花、国木田独步、後藤宙外、田山花袋な
ど多彩な顔ぶれが『小天地』に小説を発表し
ており、『小天地』が明治文学を考える上で
看過できない雑誌だとわかるだろう。

二〇二一年度日本近代文学会関西支部秋
季大会（十一月一日、オンライン開催）で、
掛野・西山・竹本はパネル発表「雑誌『小天

地』の基礎的研究」を行い、庄司が司会を務
めた。別冊の解説はその時の口頭発表を増補
改訂したものである。席上で貴重なご意見を
いただきましたこと、この場をお借りして、
厚く御礼申し上げます。

（第一回配本二〇二二年一月、第二回配本二
〇二二年十一月、全一五冊、揃定価本体九
六〇〇円＋税、琥珀書房）



■二〇二三年度 関西支部秋季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二三年
度秋季大会における自由研究発表、およびパ
ネル発表を募集いたします。支部会員の皆さ
まの積極的な応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場 二〇二三年十一月二日（日）
近畿大学

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお
知らせいたします。

◆募集人数 自由発表 若干名
パネル発表 若干グループ

◆応募締切 七月一〇日（月）必着

◆応募要領 自由発表は、発表題目および六
〇〇字程度の（応募段階における）結論まで

明記した要旨を封書でお送りください。パネル発表は、発表題目と全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文を封書でお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。また、関西支部公式ブログに記載のメールアドレスでも受け付けております。その場合、締切や要項は同様です。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】〒630-8506

奈良市北魚屋西町奈良女子大学文学部

吉川仁子研究室内

日本近代文学会関西支部事務局

もしくは、関西支部公式ブログに記載の

メールアドレスまで。

■会議の記録

三月二八日（月）

【第一回運営委員会】退会希望について、会報三五号について、会報三六号について、二〇二二年度会計監査について、二〇二二年度予算案について、二〇二二年度春季大会について、二〇二二・二〇二二年度委員の自己紹

介と二〇二二年度役割分担について

「オンライン開催」

四月三〇日（土）

【第二回運営委員会】会費制導入の提案文書について、二〇二二年度春季大会の運営について、会報三五号について、会報三六号について、二〇二二年度総会について、二〇二二

年度会計報告・二〇二二年度予算案、その他会計関連、会報（三四号）掲載の書評について、二〇二二年度秋季大会について、機関誌『関西近代文学』創刊号関連

「オンライン開催」

六月二三日（木）

【第三回運営委員会】会員の異動について、二〇二二年度秋季大会（全国大会への推薦）発表者の選出について、会報三六号について、二〇二二年度秋季大会 運営委員会の協力体制について

「オンライン開催」

九月三日（土）

【第四回運営委員会】会員の異動について、【本部】全国大会（支部）秋季大会の役割分担について、会報三六号の発送について、二〇二二年度 春季大会 形態／日程について、二〇二二年度 春季大会 企画案について、運営委員の任期短縮について、大会の記録（録画・録音・撮影）データなどの保管ルールについて

「オンライン開催」

一〇月一五日（土）

【第五回運営委員会】会員の異動について、支部ブログ「研究会紹介」について

「メールによる持ち回り審議」

十一月四日（金）

【第六回運営委員会】会員の異動について

「メールによる持ち回り審議」

十一月二三日（水・祝）

【第七回運営委員会】会員の異動について、二〇二二年度春季大会の会場校と日程について、二〇二二年度春季大会企画について、会報三七号について、日本近代文学会関西支部の英語表記について、運営委員交通費補助内規の改正について、会費制の導入について、運営委員の任期短縮について、二〇二二年度の運営委員会の体制について、本部企画委員会（支部支援班）との「意見交換会」について

「オンライン開催」

十二月一七日（土）

【第八回運営委員会】二〇二二年度春季大会企画について、二〇二二年度運営委員の候補について

「オンライン開催」

二月一二日（日）

【第九回運営委員会】会員の異動について、二〇二二年度春季大会自由発表について、二〇二二年度春季大会企画について、二〇二二年度春季大会の実施方法と運営について、二

「オンライン開催」

〇二二年度の運営体制（運営委員長／副委員長）について、二〇二二年度秋季大会について、会報三七号について、支部会計関連、運営委員の任期短縮について、各種届出の様式について

「オンライン開催」

三月二九日（水）

【第一〇回運営委員会】会則変更について、入会申込書・退会届などについて、二〇二二年度申し合わせと引き継ぎ

「オンライン開催」

■二〇二二年度秋季大会の報告

昨年度の秋季大会は、同志社大学で開催された日本近代文学会秋季大会に合流して行われました。一〇月二二日、二三日です。関西支部で発表者を募集し、選考を経て発表したのは次の五名です（いずれも二三日に発表）。

『道草』における時間——ベルクソン『時間と自由』との接点から—— 王 青

内田百閒「猫」と『新青年』——初出雑誌の特性を視座として—— 松原 大介

小林秀雄と中原中也における〈哀悼〉の交錯——テキストの〈推敲〉を視座として——

山本 勇人

武田泰淳「審判」と上海現地メディア——日本人居留民宣導政策とその問題点——

藤原 崇雅

「G線上のアリア」を奏するとき——二つの時代・言語にまたがる台湾文学——

宋 元祺

■機関誌『関西近代文学』投稿論文募集のお知らせ

電子版機関誌『関西近代文学』の投稿論文を募集いたします。

○第二号（二〇二三年九月発行）の締め切り

……二〇二三年五月五日

○第三号（二〇二四年三月発行）の締め切り

……二〇二三年一月五日

送り先、書式（文字数）等については、公式ブログを御覧ください。

創刊号は、二〇二三年三月二〇日に公式ブログにて公開されました。

○創刊号・目次

北村透谷「宿魂鏡」における道家思想——東洋的な解脱の希求 徐 亜玲

婦人雑誌における「銃後」言説形成と連載小説——日中戦争開戦期の『主婦之友』と横光

利一「春園」 古矢 篤史

小島信夫「小銃」論——記憶の技法

星住 優太

創刊の辞

編集後記



■事務局だより

◆献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先：関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆日本近代文学会関西支部の英語表記について

機関誌『関西近代文学』のJ-stage申請に伴い、運営委員の承認により、日本近代文学会関西支部の英語表記が「Association for Modern Japanese Literary Studies Kansai Branch」に定められましたので、お知らせいたします。

◆会費納入について

本年度より関西支部では維持会費制を廃止し、新たに会費制を導入いたします。会費三千円を、同封の振替払込書を使用するなどの方法で納入ください。詳しくは、同封して

おります別紙「会費制の導入について」をご覧ください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆登録情報変更について

関西支部の「登録情報変更届」を作りましたので、変更の際には事務局までお知らせください。用紙は関西支部公式ブログからダウンロードできます。

◆二〇二三年度役員 *は新規の委員

支部長 関肇

運営委員長 吉川仁子

運営副委員長 浅井航洋、西尾元伸

〔書記〕 *金岡直子、塚本章子、*原卓史、

宮川康

〔名簿〕 *武田悠希、八原瑠里

〔会計〕 熊谷昭宏、瀬崎圭二、*信時哲郎、

花崎育代

〔会報〕 石原深予、永渕朋枝、福田涼、松田

樹、禧美智章

〔広報〕 *高橋啓太、廣瀬陽一

〔企画〕 *佐々木幸喜、東口昌央、*山根直子、矢本浩司

〔事務局補助〕 西園有加利

日本近代文学会関西支部事務局

〒630-8506

奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部
吉川仁子研究室内

日本近代文学会 関西支部

会報 三七号 二〇二三年五月一日

編集・発行人 関肇

日本近代文学会 関西支部

〒630-8506

奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部
吉川仁子研究室内

※井伏文学の揺籃期・形成期をうかがう貴重な資料の公開と研究
井伏鱒二未公開書簡集

—ある級友への手紙—

青木(秋枝)美保・前田貞昭編著 井伏鱒二未公開書簡等一七一点を収録。大正六年に始まる大正期の書簡八十一通、昭和戦前期の書簡二十五通を含み、その年代の幅広さから伝記上空白の時期を補う内容を持つ。書簡の翻字に注、解説、論考を付す。

新刊・定価6600円(税)

※十蘭作品の多角的・総合的解明を目指す

久生十蘭作品研究——〈霧〉と〈二重性〉

開 信介 「小説の魔術師」久生十蘭。その作品群は多様な文体、巧緻な構成といった小説技巧の面で高く評価されてきた。本書は、十蘭作品に頻出するモチーフを切り口として、その作品世界を明らかにするものである。

新刊・定価3520円(税)

※いのちというものを考えさせる文学

秦恒平 愛と怨念の幻想

永栄啓伸 秦文学の基軸は、身内観、死生観、そして人間差別への追求である。貰い子の境遇を乗り越える身内論、「生まれた」母に知らぬ間に「死なれた」喪失感が原点である。本書はこの孤立からの葛藤の軌跡を丹念に考察する。

近刊・定価6050円(税)

※瀧口の芸術観・作品について未探究の側面に光を当てる

瀧口修造研究——〈影像人間〉の系譜

秋元裕子 日本におけるシュールレアリスムの第一人者、詩人・美術批評家の瀧口修造について論じた本書独自の視点は、瀧口の美学を貫く特質の中心に影像に対する彼の考え方を据えていることにあり、瀧口が創造原理として重視した想像力の系譜を浮かび上がらせることにある。

新刊・定価6600円(税)

※鏡花研究の未来への展望をひらく画期的な論集
論集 泉鏡花 第七集

泉鏡花研究会編 十一篇の書き下ろしの論考と、最も詳細な「参考文献目録」とを合せもって、泉鏡花研究の最新線を示すべく編集。新刊・定価7700円(税)

好評既刊
(各税込)

第一集 6600円 第二集 6600円
第三集 5500円 第四集 6600円
第五集 8800円 第六集 7700円

※明治20年代以降の文章を、動態としての「語り」と静態としての「語法」との両面から論じる。

日本近代文学における「語り」と「語法」

揚妻祐樹 言語の使い手は、言語の創造者でもある。E.コセリウの考え方に導かれつつ、二葉亭四迷や尾崎紅葉などの小説家たちが如何なる表現世界を切り開き、言語の創造者となったのかを考察。

新刊・定価11000円(税)

※織田作之助はなぜ〈大阪〉を描いたのか

織田作之助論——〈大阪〉表象という戦略——

尾崎名津子 1938〜46年の約9年間にわたる織田の創作活動を、内務省検閲や総力戦体制下の同時代状況と文学状況との関わりの中で捉え直し、織田文学の再定位を試みる。織田が〈大阪〉を描いた意図を明らかにする論集。

定価6600円(税)

※田辺聖子の膨大な文学的業績の全貌を明らかにする

田辺聖子文学事典 ゆめいろ万華鏡

浦西和彦・檀原みずす・増田周子編著 世代を超えて愛され続ける田辺文学の軌跡を事典形式で追求。小説などの作品名とエッセイ・評論などの書名を項目見出しとし、全560項目を五十音順に配列。よみ、ジャンル、初出、初版などの書誌情報と内容を掲載。年譜付。

定価3850円(税)

大阪近代文学事典

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ16 定価5500円(税)

滋賀近代文学事典

日本近代文学会関西支部滋賀近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ23 定価8800円(税)

兵庫近代文学事典

日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ26 定価5500円(税)

京都近代文学事典

日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ29 定価6380円(税)

日本近代文学会関西支部編

鉄道 関西近代のマトリクス

和泉ブックレット1 定価990円(税)

近代文学のなかの「関西弁」

—語る関西／語られる関西—
和泉ブックレット3 定価1210円(税)

文学研究における継承と断絶

—関西支部草創期から見返す—
和泉ブックレット5 定価1100円(税)

海を越えた文学 日韓を軸として

和泉ブックレット7 定価1100円(税)

村上春樹と小説の現在

定価2640円(税)

作家／作者とは何か

—テキスト・教室・サブカルチャー—
定価3960円(税)